



たつくし
竜串

再生
目標

自然資源を将来にわたり保全し続け、その重要性を啓発し、それを持続可能な形で利活用することで、自然と共生した活力ある地域づくりを進めることを目指す。

DATA

エリア：足摺宇和海国立公園
所在地：高知県土佐清水市
着手：H15

竜串の自然と共生した
地域づくり協議会

概要：竜串湾のサンゴを再生するため、海底に堆積した泥土の除去や、流域からの様々な環境負荷を抑制することを検討。現在は「竜串の自然と共生した地域づくり協議会 たつくし☆ネットワーク」として取り組みを継続。

設立日：H18.9.9

全体構想作成日：H20.3.28

実施計画作成日：H22.1.28

(R4.3 現在)



エンタクミドリイシ



竜串湾は、高知県土佐清水市南西部に位置し、温暖な黒潮の影響を受けてイシサンゴ類をはじめ、多くの海中生物が生息しています。中でもシコロサンゴ群集はその規模の大きさから学術的にも高い価値を有しています。

しかし、竜串湾では開発や産業の影響による水質悪化およびサンゴ食害生物の大発生等に加え、平成13年の高知県西南豪雨により河川から大量の土砂が湾内に流入したことで多くのサンゴが死滅しました。そこで、流域全体の視点から、かつての造礁サンゴ類を中心とした海中景観と生態系を取り戻すための取り組みを進めてきました。

平成26年度には、目標はほぼ達成できたことから、今後は新たな協議会体制において「自然と共生した活力ある地域づくり」や自然資源の持続可能な形での利活用に重点をおき、「体制づくり」「担い手確保」に向けて実践していきます。



衰退したサンゴ群集



下層植生が発達していないヒノキ林地の林床（西の川流域）



湾内に流れ込んだ流木

自然再生の手法

- ▶ 竜串湾内に堆積した土砂の除去→①
- ▶ 河川流域の土砂発生源対策→②
- ▶ オニヒトデの駆除

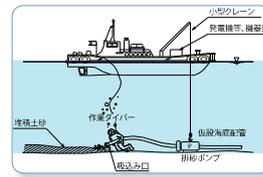
サンゴの成長を阻害する要因の排除については、湾内に堆積した土砂の除去に加え、河川流域の土砂発生源対策が求められます。

このため、サンゴ群集と周辺生態系、河川流域の現状調査を行い、合わせて海底堆積泥土除去実証試験を行っています。

また、流域全体での取り組みが重要であることから、情報発信・普及啓発および自然環境学習を推進しています。

① 海底堆積泥土除去

泥土堆積の著しいエリアにおいて、作業船から排砂ポンプを海底に下ろし、堆積した土砂を吸引します。また、これを仮設の海底配管で沿岸部に設置した水処理プラントまで送り、水分を除去した上で泥土を処分します。



作業船の仕組み



泥土除去状況（吸引）

② 土砂発生源対策

竜串湾に注ぎ込む河川上流部において、間伐などの森林整備、豪雨により崩壊した山腹の復旧工事、河川に堆積した土砂の浚渫など様々な取り組みが進められています。



林業者とボランティアが協働で行う森林整備（間伐など）



崩壊地の復旧工事



川にたまった土砂を取り除く工事

自然再生事業の効果

海・山・川の連携した取り組みにより、竜串湾の環境は、以前と比べ回復しており、湾内にはかつてのような美しいサンゴの森が広がっています。しかし、サンゴの攪乱につながる「土砂の流入」や「食害生物の発生」は今後も続いていきます。

海は、環境の変化とともにその姿を常に変えていくところです。竜串湾の「海の豊かさ」を将来にわたって守り育てていくためには、海の環境の移り変わりを継続的に見守る活動（モニタリング）が必要です。そのためには、活動に協力する「ひと」が必要不可欠となります。今後は、回復した自然資源を活かし、利用の促進を図ることを通じて地域づくりにも貢献するとともに、環境学習等を通じて子どもたちへの理解も深め、次世代の担い手づくりへとつながっていくことも期待されます。

関連ホームページ

まなぶ 竜串自然再生データベース：<https://tosashimizu-geo.jp/learn/#database>



S59(1984)
テーブル状のサンゴが幾重にも重なり、大きな群集を作っていました。



H23(2011)
サンゴは長年に回復しています。



H12(2000)
1990年代に入った頃から徐々にサンゴが衰退しはじめ、この場所でもサンゴが消えてしまいました。



H14(2002)
高知県西南豪雨から1年後、海底には泥土が残り、何も見えない。泥土は波で巻き上がり、ここに発生させて、サンゴの成長に影響を与えました。

自然再生の取り組み実施

おぼろ 大濠（海域公園3号地）でのサンゴの衰退と回復

ここに注目！

自然と暮らしを
結び付けた普及啓発

持続可能な地域をつくるためには、地域経済を活性化するとともに、自然によって現在の暮らしが保たれていることを広く一般にも実感してもらうことが重要です。そのため、自伐型林業の推進や里山を体験できるキャンプ場づくりを行うほか、ピジターセンターにおけるサイエンスカフェの開催や桜浜の海浜植生勉強会・保全活動、竜串における自然体験メニューの創出等にも今後取り組み、地道な普及啓発を進めています。

自然再生の担い手たち インタビュー

八幡湿原

地域の自然を学ぶことで
子供たちが成長する



白川勝信氏

(芸北高原の自然館学芸員)

湿原再生のため、調査・研究などに加え、環境学習にも力を入れています。子供たちは、自然の中で希少種のことや、湿原や草原の成り立ちなどを学ぶことで地域の自然の素晴らしさを知り、これをきっかけに動植物についての調査や創作活動にも展開しています。その成長ぶりは親も驚くほど。子供たちを通じて、地域の人々が八幡湿原の自然の大切さを再認識することにもつながっています。今後も学校などと連携しながら自然再生の輪を広げ、工事後の管理など次世代の担い手が育っていくことを期待しています。

自然再生事業は、NPO や地域住民をはじめとして、多様な主体の参画と創意により実施する事業です。

いま、全国各地に自然再生に取り組む新たな担い手たちが登場しています。

阿蘇

安全安心な食材供給が
私たちの務め



鎌倉直美氏

(阿蘇草原再生協議会構成員)

牛が好き、阿蘇が好きで、畜産を仕事にすることを決めました。今は毎日、北外輪山上にある牧場で繁殖牛や子牛の世話をしていますが、うれしいのは子牛が生まれ牧場で元気に育っていくこと。消費者に安全安心な食材を供給するには、健康な牛が育つもともになる健康な草原が必要です。高齢化や後継者不足で難しくなっている草原の利用や維持管理を続けていくことが草原再生と考え、若い畜産仲間と一緒に、安心して働ける環境づくりや、広大な草原を活かした畜産業を盛り上げるための取り組みをしていきたいと思っています。

中海

『大好き中海！！』
ファンを増やす



小倉加代子

(認定 NPO 自然再生センター)

「大好き中海」「中海・宍道湖の幸でお料理することが得意なの」「中海の赤貝（サルボウガイ）じゃなきゃ!」「中海でもっと遊びたい」と言いたくなるような中海にするため、自然再生事業はもちろん中海に触れる環境学習も大切にしています。それぞれの地域に当たり前にある自然ですが、人々が手を加え続ける事によって維持、再生している里海や里山があります。中海も意宇の入海と呼ばれた里海です。関わることによって、私たちに有用な恩恵を与えてくれる大切な場所です。これからも、中海の「生態系サービス」を皆さんと一緒に五感で感じる事業を展開していきたいと思っています。

竜串

海の「花咲か爺さん」に
なりたい



竹葉秀三氏

(竜串観光汽船代表取締役)

子供の頃から海とともに暮らし、私を育ててくれたのは、サンゴや魚たちが豊富な竜串の海といってもよいほどです。海の汚染やサンゴの衰退を目の当たりにして、ダイバー仲間とともに海の清掃やオニヒトデの駆除、サンゴの移植などの活動をしてきました。一生涯それを継続し、かつてのような美しい海を再生させることが私の使命だと思っています。

最近では地元小学校と協力し、地元にも海を知らない子供たちに、グラスボートを使って海中公園を体験させ、竜串の海の楽しさや素晴らしさを伝えています。

釧路湿原

自然再生を市民の
日常生活に根づかせたい



新庄久志氏

(釧路国際ウェットランドセンター)

釧路湿原の自然再生では、250,000ha に及ぶ流域全体の環境負荷を減らすことが必要です。それには市民自らが今のライフスタイルを見直し、変えていくことが求められます。そのステップとして、市民が既にやっていることの中に、自然再生に繋がることのある、ということに気付くことが重要だと思います。このため、数多くの活動を掘り起こし、互いに結びついていくような取り組みを進めていますが、さらに大きな社会の動きに発展していくよう願っています。そして市民グループが事業推進や管理の担い手になり、自然再生が市民の日常生活にまで定着していくのが私の夢です。